

青山教会会報

「天に富を積む」

出エジプト記二〇章十五節
マタイによる福音書

十九章十六〜二十六節
牧師 増田将平

ある青年が主イエスに尋ねました。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」。この人は金持ちで聖書を良く学んでいました。人は彼のことを神の祝福で豊かに満たされた人物として見ていました。けれども、彼の心には「自分には何か欠けている」という思いがいつもつきまとっていたのでした。主イエスは彼の心を知った上で答えました。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである」。主イエスの答えは青年の心を正しい方向に向けさせます。彼は善い生き方をすれば永遠の命を手に入れることが

できると考えていました。だから主イエスを「先生」と呼んでいます。あたかも習字の先生が生徒に手本を見せるように、この人に模範を示してもらえば、あとは自分が行うだけだと考えたのです。彼は自分の力、可能性を信じていました。

確かに主イエスは善い方、神の子ですが、青年に善い御方、父なる神に目を向けさせようとなさります。主イエスはいつでも相手の心を御覧になってその人にふさわしい言葉で語られるのです。だから主イエスが彼に言ったことを単純に規則のようにすることはできないでしょう。

青年は十戒を始めとする神の掟の全てを守ってきたと断言します。すると、主イエスは言われました。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」。主イエスは何を意図されたのでしょうか。全財産の寄付という善いことをすれば、引き換えに永遠の命を得ることができるという意味ではありません。主イエスが言われたことは十戒にも律法の規定にも記されていません。どうして実行不可能と思われることを命じられたのでしょうか。

青年は十戒の額面通りの言葉は守ってきました。しかし、「盗むな」は盗まなければいい、という教えではなく、貧しい人々に分け与えること、隣人への愛に生きることへ招く言葉なのです。「本当にあなたは十戒をみな守ってきたのだろうか」と主イエスは問うておられます。主イエスの言葉によって、彼の愛の正体が明らかにされます。完全どころか、本当は隣人を愛しておらず、自分を中心にして生きてきたことに気づいて欲しかったのではないのでしょうか。彼は初めて自分できない善いことがあるという現実に向面しました。「隣人を自分のように愛する」ことを実行していると思っていましたか、

本当は全くできていないことを知り、自分に挫折しました。だからこそ彼は主イエスに反論しませんでした。「そんなことは聖書のどこにも書いてないではないか」とは言わなかったのです。

主イエスは生意気な若者を打ち負かすために無理難題をふっかけたのではありません。自分の乏しさを抱えたままで、ただ一人の良い方、神の前に立つことを願い、待つておられるのです。マルコ福音書にはその時、「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた」とあります。

問題は「善いこと」ではなく「善い方」であつて、ただお一人の善い御方、父なる神に目を注げばいいのです。しかし青年は自分に失望し、悲しみながら去つて行きました。

そして主イエスは弟子たちに言われま

す。「金持ちが天の国に入るのは難しい。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」。すると弟子たちは非常に驚き、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言います。彼らは「ああ、俺たちは金持ちでなくて良かった」とは言わなかったのです。あの青年こそ、天の国にふさわしいと考えていたのです。その反対に、最もふさわしくないのは子供たちだと考えて、主イエスのもとに子供たちが近づくのを妨げました。しかし、主イエスは、金持ちは天の国に入れないとは言つていません。「難しい」と言われたのでした。なぜなら、神様よりも自分の富に信頼を置くからです。だとすれば、「金持ち」とはお金を沢山持っている人のことだけではないでしょう。ここでの「金持ち」とは、お金だけでなく、様々なものを持つている人、それによつて自分の力に信頼できると思つてい

る人のことです。主イエスは富める青年に何よりも自分の心の貧しさに気付いて欲しかったのです。

「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」。主イエスは「神様との関わりにおいて何も持っていない、貧しい自分、善いことができな

い自分を知らなさい。そういう自分を知る人こそ幸いだ」と言われました。なぜでしょう。「人にはできなくても、神にはできる」からです。主イエスはそのような人間を救い、天の国に入れ、永遠の命を与えるために来られたのです。乙女マリヤは聖霊によつて身ごもつたと言われた時に叫びました。「どうして、そのようなことがありえましようか。わたしは男の人を知りませんのに」。すると天使は答えます。「神にできないことは何一つない」。この天使の言葉は主イエスのご生涯を貫いています。

青年が求めたのは「永遠の命」でした。永遠の命についてヨハネによる福音書三章十六節でこのように聖書は告げます。

「神は、その独り子をお与えになつたほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。私どもが永遠の命を得ること

ができるように、神は独り子をこの世界に与えてくださり、主イエスは十字架についてくださいました。それほどまでに私どもを愛してくださいさつてい

るのです。昨日は二つの教会の会堂見学に行きました。そのうちの一つである東久留米教会の石田真一郎牧師は献堂式に配布された報告書の冒頭にこう記しています。

「会堂建築は神様からのレッスンでした」。どういうレッスンかというと、人間にできない数々の困難に直面しても「神にはできる」ことを知るためのレッスンだったので。私どもの会堂建築の歩みにそのまま当てはまる言葉だと思ひました。会堂建築だけでなく、キリスト者として生きることもそのような神様からのレッスンの連続ではないでしょうか。

抵抗するマリヤに天使が告げたように、主イエスが私どもに言われます。

「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」

何でもおできになる神が私どもと共に進み、共に働いてくださいます。

この方により頼みたいと思ひます。主イエスは私どもに言われます。

「わたしに従いなさい」

(二月十九日礼拝説教要旨)